



## 医療費に経済合理性の観点を導入

鈴木誠二

ウェル・ビーイング代表取締役、農学博士

テルモで16年間、薬の研究開発を行い、その後、予防医療のコンサルティング会社ウェル・ビーイングを設立しました。設立のきっかけは、日本の医療費への問題意識でした。いま通院すると、健康保険組合が医療費を七割負担します。しかし、病気を予防できた可能性もあったのではないか、あるいは本当に必要な検査や治療だったのか。医療費に対する検証もないまま医療費が支払われています。薬も、日本では抗生物質が比較的多く処方されるので、抗生物質漬けの生活です。そのため、多剤耐性菌のような問題が必然的に起こってきます。

もっと医者側が一般の方々に医療情報を伝え、一般の方々が「自分の健康は自分で守る」「治療法も検査法も医師も自分で選ぶ」という意識を持てば、病気はもっと予防できますし、悪化を防ぐこともできます。弊社はそのことを健康保険組合の常務理事の方々にお教えするという仕事をしています。

社員とその家族が健康になれば、結果として会社の生産性の上下変動

のリスクをヘッジすることができるわけです。その意味で事業経営者も健康保険常務理事と一緒に社員の健康問題に取り組む必要がある。しかも、その費用を効率的に使うということがとても重要になってきます。

私たちの会社ではQOL(生活の質)を下げず、投資のリターンをいかに上げるかということも行っています。医療も予防も、経済の観点に入れて、本当に効率的で無駄のないものを行う。そのためにはある程度、専門家の知恵を借りるのがいいと思います。

どうすれば効率的になるのか。病気になりやすい人にターゲットを絞ってその方々をマネジメントすれば、効果的に医療費が使われます。つまり病気になりそうな人を見つけ、その人の病気を予防する。このことに手厚くお金を使うと、圧倒的に医療費は削減できます。保険料が適切な医療に使われることには何の問題もありません。しなくてもいい検査、飲まなくてもいい薬、重病でもないのに手厚い看護など、こうした部分を効率化していくことが必要なのです。